

[遺族] 安田 瑞生 氏（平成 13 年（当時 2 歳）、父を交通事故で失う）

[要旨]

○当時の状況

父が亡くなったのは、平成 13（2001）年 8 月 23 日、暑い夏の昼下がり、私が 2 歳で兄が小学 2 年生の時でした。大型トラックによる玉突き事故に巻き込まれたのです。

その日、父は仕事のため東名阪自動車道を利用して移動中でした。前日の台風により、道路工場の影響で事故現場付近は 8 km の渋滞が続いていました。父は後ろから 2 台目に停まっていた、そこへ大型トラックが猛スピードで追突したそうです。7 台の車が玉突きになり、9 人がケガをして、父は大型トラックの下敷きになって亡くなりました。

その日を境に生活が一変し、母と兄との 3 人の生活が始まりました。当時を覚えていませんが、幼かった私は父が亡くなった意味も分からず、玄関のチャイムがなると「父ちゃん、お帰り」とうれしそうに駆けだして行ったと聞きました。でも父が帰ることは二度となく、次第に「父ちゃん、帰らへん」と呟くようになったそうです。

幼いながらも、だんだん事実に関心し始めたものの、そのことを受け入れるのに戸惑っていたのかもしれない。

○父への思いについて

私には父の記憶がありません。保育園や学校で父の日のプレゼントを作った時やテニスの試合で賞状をもらった時、生きていたらどんな顔で喜ぶかな、どんな声で褒めてくれるかなと想像し、直接手渡せたらいいなと思いながら父の写真を眺めるばかりでした。私だけが父を覚えていない。抱っこされたことも、手をつないだことさえ思い出せません。覚えていたかったと何度も思いました。

そんな私に、母は、父がそばにいるような口調で聞かせてくれました。私達を可愛がってくれた話や面白かった話、仕事をハツラツと頑張っていた話を聞く度に、父が我が家にとって大きな存在だったことが伝わってきて、誇らしくもあり、温かい気持ちになりました。家族でお墓参りをしたり、父の話を聞いたり、「生命（いのち）のメッセージ展」の父に会いに行ったこともあり、周りのおかげで私も家族と一緒に父を思い浮かべる時間を少しでも共有できたのではと思っています。

兄はお父さんが大好きで、お風呂も寝るのも遊ぶのもお父さんにべったりのお父さんっ子だったそうです。父が亡くなって初めての兄の誕生日の夜、兄が父の車の中で泣いていたそうです。「今日こそ帰ってくると思った」と言ったと母から聞きました。兄は滅多に泣きません。もう帰らないと分かっているのに帰るのを願っていたのだろうと、想像しきれない悲しみを感じます。

○ハンドルを握る重みは命の重みと同じ

裁判も大変だったようです。加害者の運転手が鹿児島島に住んでいたため、刑事裁判は鹿児島島で開かれました。母は私達を祖母に預けてまで裁判に行っているのか迷ったそうですが、被害者の思いを知ってほしい、裁判を見届けたいと鹿児島地方裁判所と宮崎高等裁判所にも行きました。法律や裁判のことなど知らなかった母が、よく遠い九州まで何度も行ったものと、母のぶれない正義感と父への思いを感じます。

事故の新聞記事を見ると、父の車は滅茶苦茶、他の車もあちこちに飛ばされていて、命を奪われた父の痛みや悔しさは計り知れません。父はもっと生きてかったはずです。私達の成長を見たかったはずです。今も事故のニュースを見ると、ドキッとします。家族はどんなに悲しいだろうとつらくなります。父や、事故で亡くなった多くの人達こそが、誰よりも事故ゼロを願っている気がしてなりません。

命が一番大切、命を奪ってはいけません。これは誰でも知っているはずですが、いざ当事者となって痛いほど気付かされるのでしょうか。事故を起こしてから後悔しても、失った命は元に戻りません。父を死なせた人は運転が仕事でした。でも取り返しのつかない事故を起こしてしまいました。初心者はもちろん運転に慣れたベテランも、どんな不注意や油断で事故になるか分からないので、みんなが初心を忘れず常に安全運転を心掛けてほしいと思います。

私も数年前に免許を取りました。母は言います、「ハンドルを握る重みは命の重みと同じ」と。事故は未来ある命を奪います。だから教習所で学んだことを忘れず、自分の命、周りの命を大事に思って運転することを父に約束して、ハンドルを握ろうと思います。

○家族に感謝

私が気付いた時は母子家庭でした。まず母に感謝したいです。仕事、家事、交通安全活動などテキパキ動く母を見ては、一人二役で頑張っていると思っていました。絵本の読み聞かせ、塾やテニスの送り迎えでの応援、休みの日には遊びに連れて行ってくれるなど、私達と過ごす時間を大切にしてくれました。私が悩みを言えば、一生懸命に聞いて一緒に考えてくれました。簡単な手伝いをしただけで喜んでくれました。時には厳しく叱られて素直になれない時もあったけど、私達のために真剣に叱ってくれました。母は私の誇りです。

兄にも感謝です。おもしろい冗談で笑わせてくれて、時には勉強の相談に乗ってくれ助かりました。

父の親である祖父と祖母にも感謝です。よく私達の子守をしてくれました。祖父母にとっては自分達の子供を亡くし悲しい思いをした中で、私達にいつも笑顔で優しくしてくれました。今も帰省する度に大歓迎。ホッとさせてくれる祖父母です。成人式を迎えた日、振り袖を着て祖父母の家に挨拶に行き、父の遺影の前で写真を撮った時、私には父の思い出がなくても、父を心の支えにする家族の中で、父に感謝しながら大きくなれたのだと感じました。

母はよく「お母さんの力だけで育ったんじゃない。感謝したい人が沢山いるのを忘れない

で」と言います。本当にその通り。沢山の支えのおかげで今があると、感謝で一杯です。

○支援に感謝

私は2歳から今まで、周りの人と沢山の支えに恵まれながら育ちました。東海交通遺児を励ます会、三重県交通遺児を励ます会、NASVA 三重など様々な支援に出会え、小さい時から高校を卒業するまでお世話になりました。行事の度に優しく歓迎され、嬉しい思いや楽しい思いをさせていただき、どれも温かい思い出です。

高校の時、交通遺児育英会でアメリカ語学研修に連れて行っていただいたのが契機となり、大学では英語と中国語を学びました。学費や下宿で支援いただき充実した学生生活を送らせていただきました。特に育英会の学生寮では寮母さんの食事に元気付けられ、一人暮らしの心強い支えになりました。

育英会のコロナ支援金も有難かったです。その頃私は外国人観光客が多い京都のホテルでバイトをしていたのですが、コロナでバイト全員が解雇になり、その上、兄のお下がり愛用していたパソコンが壊れ、大学もリモートだったので途方に暮れていました。バイト収入が途絶え就活の不安も重なって、弱音が増えていたと思います。そんな矢先の支援金、「頑張れ」とエールをもらったようでした。元気をなくしてはいけない、頑張ろうと心から思いました。おかげで就職することができ、バイトで学んだおもてなしを一から教わりながら、今も周りに育ててもらっています。

「父も応援してくれている」。その思いはこれからも変わりません。母を安心させ、父に喜んでもらえるよう、人との一期一会に感謝しながら歩んでいこうと思っています。

○無事への願い、支援のバトン

最近、こんなことがありました。新型コロナウイルスのワクチン接種をした翌日の夜、社員寮から職場に電話がありました。母が私と連絡が取れず心配しているとのこと。母に電話してみると開口一番、「体は大丈夫？ 無事で良かった」と半泣きで喜ぶ声が聞こえてきました。ワクチン接種の後、仕事を休む予定で、副反応を母に伝えるはずだったのですが、体調が良かったので夕方から出勤していたのです。それを知らなかった母は、電話に出るはずの私がLINEの既読もつけず、部屋で倒れているのかと不安になったそうです。履歴を見ると幾つもの着信と「熱出なかった？」「大丈夫なん？」「お願い、返事して」とメッセージが時間を空けつつ届いていました。母は、父が運ばれた病院に行く途中、父の携帯に何度電話してもつながらなかったことを思い出したそうです。20年前の悲しい記憶が、母をこうも動揺させ、何年経っても似た状況になると最悪のことを考えてしまうのだと知りました。自分の命は自分のものだけじゃないと、改めて分かりました。

母にも体を大事にしてほしいです。私が小学生の時、母が目の前で倒れたのは衝撃でした。兄と必死で母の顔に氷を当てて、私は「お母さん」と叫び続けた覚えがあります。意識が戻

った後も、しばらく母の腕にしがみついて泣きました。貧血で大したことにならず良かったのですが、元気な母がいきなり倒れ、たった一人の親に何かあれば自分はどうになってしまうのか、誰を頼りにすればいいのか、怖いくらい不安になりました。

事故の遺族という立場だと、なおさら無事への願いが強いと思います。そして支援に出会えるかどうかで、少しでも安心できるのか苦しみが続くのか、先が違ってくるのではないのでしょうか。

私の家の場合、叔母が事故から数か月後、交通事故関係の支援団体をネットで調べてくれたおかげで早くに支援と出会えました。支援を知らない家庭や子供達は大変だろうと思います。特に子供が自分で探すのは難しいと思うので、身近な人が気にかけることや、警察や行政、学校などを通し、支援のバトンが適切につながることで、支えが必要な子供達に少しでも早く支援が届けられれば良いと思います。

私達家族が支えのおかげで歩めたように、これからの子供達が支えに癒され、無事に安心して歩めるよう願っています。